

今日、海外にいる中国語作家のなかで、在米作家白先勇はおそらくもっとも読まれている一人であろう。白先勇の代表作である「台北人」シリーズは、台湾で「台湾文学経典」の小説類の第一位に選ばれただけでなく、彼の小説が八十年代から海外中国語作家の作品としてはじめて大陸の読者に紹介されて以来、今日でも人気が衰えていない。白先勇の文学の影響は二十世紀の終わりごろにひとつの頂点に達したと言える。

しかし、三十数年前に、著名な在米文学評論家夏志清は、すでに三十数年後白先勇ブームを予見したかのように、白先勇文学の価値に注目してきわめて高い評価を与えていた。彼は、何より白先勇が独特な視角から「民国史」と、「中国人の精神状態」を表現したとして、白先勇の文学を高く評価した。三十数年前の夏志清の評価は、その後の白先勇研究に大きな影響力を持ち続けたといえる。しかし、従来、白先勇と白先勇の文学に関する研究がけっして少なくないとはいえ、白先勇の独特な視角を抉り出し、白先勇文学の価値を十分裏付けられるような研究はまだ少ないと思われる。一方、夏志清自身は、白先勇の独自性とその文学の価値を洞見したが、白先勇文学についての分析を行っていない。その意味では、二十世紀末の白先勇ブームにおける白先勇に対する捉え方が夏志清の評価から大きな影響を受けたが、夏志清と考え方との間にずれがあるように思われる。

白先勇文学の独自性がどこにあるのか。その独自性をどのような価値を持っているのか。それを明らかにしない限り、白先勇文学の台湾文学、ないし中国現代文学にとっての意義見損なうことになるであろう。

白先勇は中華民国政府の著名な将軍白崇禧の息子で、一九三七年に中国大陸の広西省に生まれた。中華民国が中国大陸での統治権を失った一九四九年に、十二歳の白先勇は兄弟と共に香港に脱出、一九五二年、民国政府と一緒に台湾に渡った父母の後を追って台湾に入り、そこで中学校と大学教育を受けた。台湾大学に在籍していた一九六〇年三月に、白先勇は同じ外国語学部のクラスメート王文興、欧陽子、陳若曦らと共同で『現代文学』を創刊し、二十世紀の西洋文学を積極的に紹介する傍ら、自らも積極的に文学創作を行なって、相次いで十一篇の短編小説を『文学雑誌』や、『筆匯』、『現代文学』に発表した。一九六三年、白先勇は留学のためにアメリカに渡り、そのままアメリカに定住するようになった。彼は一九六四年からアメリカで文学創作を再開し、翌一九六五年に代表作である「紐育客」シリーズ、「台北人」シリーズをスタートさせ、『現代文学』で発表した。今日まで、白先勇は三十八編の短編小説と一部の長編小説『孽子』を世に送り出している。

従来、白先勇の作品「台北人」シリーズに対する欧陽子の研究は、白先勇の作品の根源的などころを衝いたようである。欧陽子の著作は、「台北人」シリーズの作品を逐一に分析した十四篇の論文と、作品の主題を概観する「白先勇の小説世界」から成っている。著者は作品分析の論文の中で、主として白先勇の優れた創作技法、巧みな作品構成と表現の鋭

さなどに着目し、作品の芸術性を高く評価した。さらに、「白先勇の小説世界」において、欧陽子は「今と昔の比較」、「魂と肉欲の争い」、「生と死の謎」という三つの側面に分けて、白先勇の作品の主題を探究した。欧陽子は、白先勇の作品の中には、中国の伝統文化・社会の解体と没落に対する哀惜の念が見られると指摘し、それは究極的には、止まらぬ時間の流れの中で、生命が減びていく、という白先勇の抱いた人類の宿命への不安と怨恨に由来するものだとして主張した。つまり、彼女は、白先勇の作品の主題が、人類の抱えた普遍的な危機意識を表現するものだとしているのである。

では、前節まで見てきた白先勇の作品における普遍的な主題と歴史的な主題とは、白先勇の文学においてどのような関係にあったのか、また、それをどのように位置づければいいのか。これについて、山田敬三の「民族アイデンティティと白先勇の文学」の中での指摘はたいへん示唆的である。

白先勇がほぼ三十年間にわたって書き継いできた三十五編の短編小説と一編の長編『孽子』は、題材や内容から大別すればおよそ三種類に分類できるのであるが、しかしそれらの多くに共通してみられるのは、アイデンティティへの発問であり、中でも民族的なそれへのこだわりが、大きな比重を占めてある。

つまり白先勇の文学創作には、アイデンティティへの問いという一貫とする主題が存在しているということである。作品に見られる危機意識——欧陽子が指摘した人間の宿命に対する危機感や、陳正醒が抉りだした歴史によってもたらされた不条理など——が、いずれも彼の貫いた主題に密接にかかわっている。しかし、アイデンティティへの探究という大主題から見れば、欧陽子と陳正醒の研究は、それぞれ白先勇文学における一側面だけを取り上げたといえる。なぜなら、欧陽子は歴史がもたらした危機意識の構造に注目していないし、逆に、陳正醒は「歴史」という要素を重視したものの、実存に由来する危機という普遍的な主題に目を配っていないと思われるからである。白先勇という作家の全体を見るときに、実存と歴史の両方に由来する危機意識を総合に考察しなければいけないと思われる。

欧陽子は、「台北人」シリーズから、実存に由来するアイデンティティの危機、換言すれば時間の流れの中ではまったく無力である人間の宿命からする自我の意味の喪失感、という白先勇が表現しようとした主題を見事に析出した。しかし、「台北人」がほかの「○○人」ではなく、「台北人」である最も大きな理由は、それが中国近代史という背景の中に置かれているからである。つまり、「台北人」には、夏志清が指摘したように、白先勇の「歴史感覚」が存在しているのである。実存に由来するアイデンティティの危機、喪失感はいわば世界中の人々に共通したものであるが、中国近代史の翻弄によってもたらされたアイデン

ティティの喪失は、まさに「台北人」だけが味わわされた不条理である。時間意識だけで包括しきれない歴史意識の現れが、「台北人」シリーズの最大の特徴であるといえよう。

しかし、注意しなければいけないのは、中国歴史を中心に据える民族アイデンティティは、白先勇の全作品を貫くものではないし、その内実もけっして一枚岩として捉えるべきではない。それには二つの理由が挙げられる。まず、白先勇の文学創作活動の全過程を概観すればわかるように、歴史的テーマと普遍的なテーマが消長、起伏の関係にある。一時期において確かに歴史的テーマが鮮明に現れたが、しかし、その後、それを乗り越えようとする反動も明白に存在している。二〇〇三年十月に発表された最新作の中に、中国の歴史、文化などの中国要素がまったく見当たられないのは、そのためだと思われる。本稿は、アイデンティティの危機を深く探求することによって大きく変化していく白先勇の創作過程を、個人の存在に不安を感じた早期、中国人のアイデンティティへの探求・構築を試みた第二期、そして、歴史、民族の制限から自由になろうとする第三期、という三つの時期に分け、そこに見られる中国要素の起伏を追い、白先勇のアイデンティティの流動性、多重性及び対立の様態を明らかにしたい。

二つ目の理由は、白先勇の中国に対する思いは実に複雑で、葛藤に満ちたものである。そのため、第二期の作品に現れた民族アイデンティティはけっして不変のものではなかった。まず、「台北人」シリーズと「紐育客」シリーズに取り扱われた中国要素が大きく異なっていることは周知の事実である。前者は直接中国近代史に翻弄された人々を対象にしているに対して、後者は中国と直接にかかわりを持たない海外中国人を主人公にする。時代や社会における立場の違いは、当然、この二つの集団に中国の歴史や、中国人のアイデンティティ、伝統文化などに対する異なった考えをもたらしたのである。そして、「台北人」シリーズや「紐育客」シリーズのどちらを取ってみてもわかるように、そこに表現された歴史意識や、中国像は多種多様なものである。本稿は、白先勇がアイデンティティを探求する精神過程を考察するという問題関心から、従来、十分に分析されてこなかった「紐育客」シリーズを中心に、作家の想像と中国の現実とのギャップに揺るがされながら懸命に立ち上がろうとする白先勇の中国像を手がかりに、中国人への自己アイデンティファイすることに戸惑い、しかし、こだわり続ける、という白先勇の精神世界を浮かび上がらせた。それは激動する時代に翻弄される中国人のものがく姿であり、国家、民族、文化、集団など多くの枠組みに分裂され、疎外され、抛り所をなくした現代人の一つの自画像でもありと思われるからである。

白先勇は、現在の中国で最も読まれている作家として、彼の作品における普遍的テーマと、「台北人」シリーズをはじめとした作品の中に現れた「歴史意識」は特に高い評価を受けている。しかし、その場合、白先勇の作品における「歴史意識」を単に彼の「悲憫」の気持ちや、中国文学における「滄桑感」の伝統に対する継承、という側面から捉えるなら、白先

勇文学における重要な特徴を見落とすことになる。なぜなら、彼における「歴史意識」は、白先勇自身の精神的苦闘の過程の中で形成され、最終的に彼の作品の中で結実したものである。この点を明らかにするために、本稿は、「歴史意識」を体現した「台北人」シリーズより、「紐育客」シリーズの作品に注目し、それらの作品を白先勇自身の精神的な葛藤と自らのアイデンティティに対する追求を反映したものとして捉え、作品の中に現れた白先勇の「中国」像の変化過程と、白先勇における「歴史意識」の独自な特徴を明らかにした。

戦後、台湾に撤退した親の世代の価値観に共感を持ちえず、また、閉塞した台湾の社会状況に抑圧を感じた「六十年代世代」の一員として、白先勇はその仲間たちの多くと同じように、大陸からはじき出された後に、さらに出口の見えない台湾を脱出しようとして、アメリカに自己放逐をした。この世代の若い文学青年たちは、親の世代や、台湾社会に疎外感を感じ、西洋の現代文学の導入によって、そうした抑圧感を打破しようと努力した。さらに、彼らは異国でまた疎外感を感じ、それが彼らの創作の源泉となり、例えば「留学生文学」や白先勇の「紐育客」シリーズを生み出した。

しかし、白先勇の場合、彼は他の仲間と同じような二重の疎外感に加えて、さらに自分自身の幼年時代の孤独な体験、と同性愛者であることによって、人より周りから疎外された孤独感に深い理解があった。彼は自分自身の体験と国家、民族の歴史、及びそれによって翻弄された人々の運命とを重ね、歴史にはじき出された人々を、ただ「悲憫」をもって表現しただけでなく、同じにはじき出された者としての視線から疎外された敗者、弱者の悲運を描き、歴史の表舞台で決して現れることのない「裏」の一面を見事に抉り出した。近代国家の意識が形成された中で、二十世紀の中国からはじき出された「漂泊者」たちには、さらに深刻なアイデンティティ・クライシスを伴っていた。彼らを表現した白先勇の作には、中国文学の伝統である「滄桑感」の影響を顕著に表しているが、そうした「滄桑感」には、さらにアイデンティティの喪失という従来になかった深刻さが伴っており、それが白先勇文学にもっと深みをもたらすことになった。

同じにはじき出された一員として、白先勇自身もアイデンティティ・クライシスを痛感した。彼は「台北人」シリーズを通して、自分の父兄世代の悲運を表現したと同時に、「紐育客」シリーズを通して、二重も三重もあった疎外感の中で、自分の中にある「中国」のアイデンティティを絶えず探求した。その意味では、「紐育客」シリーズの作品は、白先勇が自らにある「中国」のアイデンティティを探求する精神的歷程を表現したものだといえる。

早期作品の中で、白先勇は、止まらぬ時間の流れの中で生命が減びていく、という人類が抱えた普遍的な不安と危機意識を表現した。渡米したあと、民族の歴史と自分のアイデンティティを意識するようになった白先勇は、自分の中にある「中国」のアイデンティティを見つめるようになり、「中国」に関するアイデンティティ・クライシスについて思考するようになった。

「シカゴの死」は、白先勇の「中国」意識がはじめて登場した作品であった。主人公は、ア

アメリカという「他者」に語られた中国像に強い違和感を持ち、自分のアイデンティティを強く意識させられたにもかかわらず、自分の中の「中国」はあまりにも蒼白で、空虚なものだったことに気が付いた。そこから白先勇は自らの出自である「中国」に対する探求を始めた。「香港——一九六〇」の中で、白先勇はこの時期の自分の中国認識をあらわした。一般的な捉え方とまったく異なった、数え切れない危機に囲まれたという香港像は、白先勇にとって、「中国」の分身に他ならなかった。そこにおいて、寛容、同情に満ちていた伝統的な中国像が崩壊し、東西対立という厳しい政治状況の中で、「中国」はもはや瀕死の主人公のように救いようがなく、一触即発の危機に満ちていたのである。伝統中国の危機と「中国」に隔絶された自分の無力感という、白先勇の「中国」に関する思いの中に、焦燥感が滲んでいた。

「謫仙記」と「謫仙怨」のなかで、白先勇の「中国」への探求が一つの新しい段階を迎えることになった。それまでの無力な主人公とは対照的に、白先勇は、若くて美しい李彤の短い一生を通じて、主人公が危機に対して抗争し、自分の運命を努めてコントロールしようとした不屈な姿を描き出した。歴史に規定された運命に決して屈服しようとしぬ孤高な李彤に対して、白先勇が強い思い入れをもって描いた。しかし、歴史に対する抵抗は無謀であり、失敗という運命は最初から決まっていた。しかも、中国の歴史の規定から逃れようとしつつも、「中国」を必要とするのは「紐育客」の危機であった。「謫仙怨」のなかの主人公黄鳳儀は、台湾にいる母親を拒絶しつつも、母親のところにしか自分の尊厳と存在価値を求められなかったのである。新たな希望を見出すことはできなかった彼女は、けっして自分の過去と断絶することはできなかったのである。このような「謫仙」たちを、白先勇は深い「悲憫」を持って描き、歴史に翻弄されつつ、それに屈服しようとしぬ「流浪の中国人」の抵抗の意志を表明する一方、中国ときっても切れない関係にあるという認識を示し、「中国」をめぐる感情の屈折さ、不条理さを表現した。

こうして自らのアイデンティティー「中国」の空白に直面しても決して諦めなく、「中国」を捜し求め続けたため、白先勇は「文革」の後、文化、道德の廢墟と化した中国大陆に深刻な喪失感を覚えながらも一筋の可能性を見出そうとした。「文革」後に発表した「夜曲」、「骨灰」という二つの作品を通じて、白先勇は今までの、自分の記憶と想像に頼った、現実性の乏しい「中国」像を問い直した。しかし、作品は、ただ「傷痕文学」のように主人公の悲運を通じて「文革」を告発するに止まらず、白先勇は、中国の道德文化に対する「文革」の抑圧と破壊にもかかわらず、なお強靱に生き延びた中国文化における「情義」に一筋の光明を見出だそうとした。この意味では、アイデンティティの危機に直面しながらも、決して屈することなく、探求し続けるという「シカゴの死」以来の白先勇の姿勢が貫いていた。

白先勇の「中国」へのこだわり、特に伝統文化への注目が顕著であるため、彼の作品を「炎黄子孫」の中華民族の復興への切望と見なし、伝統文化への回帰を賞賛する者もいる。しかし本稿の分析から分かるように、白先勇の中国認識、中国伝統文化に対する理解は、彼

自身の視角を持っていて、中国の伝統文化を無批判に賛美するようなものと一線を画した。すでに見てきたように、白先勇の「中国」は危機と希望の入り混じったもので、単純明瞭な政治スローガンにふさわしくない混沌、不安が付きまとっているし、伝統文化も現代社会の中で、幾ばくの束縛を受け、機能しなくなりつつある。

また、歴史に翻弄される人々の悲運を表現した白先勇の作品を、葬られた歴史への哀愁を表すものとして捉え、あるいは、はじき出された人々の悲劇を深い「悲憫」をもって書き留める研究もある。前者の場合、見落としてはならないのは、白先勇の作品は悲劇という結末を迎えるものがほとんどだが、主人公の自殺などの悲劇は、同時に屈服しない、抵抗の意志の現われでもあった、ということである。そして、後者の場合、忘れてはならないのは、白先勇が深い同情の念を持って、歴史に翻弄された人々を良く理解できたのは、なにより、彼もはじき出された者の一員であったからである。そして、幾重もの疎外感を味わわされた白先勇は、「滄桑感」という中国の文学的伝統を受け継ぎながら、従来の「滄桑感」になかった「外」、「周辺」からの視点、「裏」を見つめる視点を獲得した。このようなイデオロギーに左右されない「流浪する中国人」という視点は、中国文学をより豊かにするものである。この点について、白先勇ははっきりと自覚を持っている。彼は自分を含めた「六十年代世代」の作家たちを「五四」時期の文学先駆と対比して、次のように分析している。

「五四」新文学運動と異なっているのは、六〇年代台湾の若い作家たちは、「五四」時期における彼らの先駆のような、中国の伝統文化を徹底的に打倒するという熱狂さや革命的情熱がなかった。彼らは、中国の伝統文化に対して、むしろ理性的に再認識し選択するという態度をとっており、しかも、中国の伝統と西洋の近代とを結びつけようとしていたのであるⁱⁱ。

このような従来の文学に対する思想上、視野上の突破は、夏志清が白先勇たちを高く評価した所以でもあった。彼は次のように述べている。

彼らが真理を求め（求真）つつ、自分たちを中国固有文化の継承する者、発揚する者と自認する態度は、二十世紀の文芸の真なる精神を貫いている。このような精神は、若い世代の西洋の作家の中で、逆に容易に見られないのであるⁱⁱⁱ。

その意味では、「流浪する中国人」という独自の視点をもって中国を捉えた白先勇は、二十世紀の現代中国文学史において異彩を放っている重要な作家だということはけっして過言ではないのである。

白先勇の精神的軌跡を辿ることは、二十世紀の中国人の精神史のある共通の側面を明らかにすると共に、海外中国人の独自の精神状態をも浮き彫りにした。というのは、自我の

喪失は、過去から断絶された二十世紀の中国人が誰でも経験した困境である。その断絶の頻繁さ、長さはいずれも歴史上未曾有なものであったため、現代中国人は自我の空白、空虚を強く意識せざるをえない。二十世紀後半の中国大陸だけを見ても分かるように、十年が経てば、政治、文化、理念から社会倫理、生活習慣まで目まぐるしく変化し続けた。過去が捨てられた後に人々の中に大きな空洞だけが残された。

一方、こうした内面の空虚を埋めるために新しい思潮、主義、政治的スローガンに走り、そしてまた歴史の翻弄に遭遇し、幻滅を味わい、という抜け出せない困境に陥った中国人に対して、中国にアイデンティファイしながらも、距離を置き、中国を相対化していた白先勇のような海外中国人の精神的苦闘は、歴史の翻弄に抗い、人間の尊厳を示したものである。こうした「流浪の中国人」の経験は、中国人全体の精神的財産として認知し、受け継がれていくことは大切であろう。

i 山田敬三「民族アイデンティティと白先勇の文学」、『台湾文学研究の現在』緑蔭書房、一九九九年三月。

ii 白先勇「六〇年代台湾文学：「現代」與「郷土」、『樹猶如此』聯合文学出版社、二〇〇二年二月、186頁。

iii 夏志清「白先勇早期的短編小説—「寂寞的十七歳」代序」、白先勇『寂寞的十七歳』遠景出版、一九八四年二月第十一版、4頁。